

自己愛傾向と対人関係に関する研究

——自己愛憤怒喚起場面の変動における怒り感情の処理の検討——

大久保 映 里

自己愛は誰もが抱いている一般的な心理機能である。しかし、自己愛が高すぎるとその振る舞いは他人との関わりに支障をきたし、社会生活を困難にする。自己愛の概念に関して、現在大きな支流となっているのは Kohut と Kernberg の理論であり、その二つをまとめたのが Gabbard である。Gabbard は Kernberg の臨床像から誇大的・自己中心的であり、周囲を気にかけないタイプの自己愛を「無関心型」の自己愛として捉え、Kohut の臨床像から抑制的で引きこもりがちであり、他者からの評価や反応に敏感なタイプの自己愛を「過敏型」の自己愛として捉え、2つに分類している。一方、自己愛者の病理には対人関係が深く関わっており、対人関係に影響を及ぼす感情には怒りがある。誇大な自己愛を持つ者の怒りの表出は、受け手からは不当だと思われる可能性が高く、悪影響を及ぼしていると思われる。そこで、本研究では、自己愛傾向を誇大型と過敏型に下位分類し、自己愛憤怒場面における相手との関係性の変動による怒りの表出の変化および感情の変化について検討することを目的とした。

方法としては、大学生 327 名（平均年齢 20.63 歳）を対象として、自己愛尺度、自己愛憤怒喚起場面スクリプト、自己愛憤怒喚起場面妥当性尺度、怒り傷つき感情状態尺度、怒りの表出尺度からなる質問紙調査を行った。

その結果、自己愛パーソナリティ目録の「誇大型」「過敏型」についてそれぞれ参加者間要因（高群・低群）×2つの場面を参加者内要因とし、怒りの表出得点を従属変数とした2要因の分散分析を行い、本研究では、誇大型自己愛が高い者は、自己愛憤怒喚起場面に会った際、怒りの感情を持ちやすく、怒りの表出も行いやすいことが明らかとなった。特に、軽蔑する対象の方がそれが表れやすいことが示唆された。一方で、尊敬する上位対象と軽蔑する上位対象との比較では、尊敬する上位対象の方が怒りの制御を行ないやすいということが示された。これは、自己愛傾向者が、自分が尊敬できその人から自分が受け入れられていると感じることによって、自分自身を価値のある人間として認識するという特徴を持っていることから、尊敬する対象に対して怒りの表出することで自分が受け入れられないという恐れを感じ、怒りの制御を行なっているのだと考えられる。それに対して過敏型自己愛者は、場面の变化によって怒りの表出に変化はなかったものの過敏型が高い方が怒りの表出をしやすくなるということが示唆された。これは、過敏型自己愛が高いと対象に関係なく怒りの表出をしやすいいことを示唆している。過敏型は、誰にでも怒りの表出を行うことから味方がいなくなり、引きこもりなどにつながるのではと思われる。